令和６年度 日本精神科医学会学術教育研修会 報　告

心理部門

青野　将知

令和６年度日本精神科医学会学術教育研修会心理部門は，令和６年10月24，25日の両日にわたり，日精協広島県支部の担当により広島県医師会館で開催された。「チーム医療における公認心理師のこれから」をテーマとし，講演，シンポジウムで構成され，全国から91名の参加者を得て開催された。

開講式では，日精協広島県支部長の石井知行先生が開講の挨拶をされ，続いて日本精神科医学会学会長の山崎學先生が挨拶をされた。

会長講演

山崎先生は「精神科医療の将来展望」と題して，①精神保健福祉行政の歩み②精神保健福祉の動向③精神科医療における社会的偏見④精神科医療の将来像について話をされた。

講演Ⅰ「認知症との関わり」

メープルヒル病院院長 石井伸弥先生は，最近10年で年齢別認知症有病率が低下した背景や，認知症に対する公的な取り組み，認知症基本法の目指す共生できる社会のあり方やポイントについて説明された。公認心理師の業務として，心理アセスメント，本人・関係者支援，教育および情報提供を挙げられた。認知機能検査では，点数だけで判断せず経過や検査時の様子も重要と説かれ，多様な要因を理解し治療法へつなげること，認知症をもつ人を「人」として尊重し，その立場に立ってケアを行う「パーソン・センタード・ケア」の考え方が一番大切と話された。次に診断直後の何も支援がない「空白の期間」の支援の重要性が認識され，正しい知識の提供，心理面のサポートが必要と話された。また家族の接し方や感情表出が，患者の中核症状に大きな影響を及ぼすため，家族教育，情報提供が重要であり，認知症サポーター養成が重要な役割と説明された。最後に新薬レカネマブについて説明され講演を終えられた。

講演Ⅱ「チーム医療において公認心理師のめざす役割とはたらき」

広島修道大学健康科学部心理学科教授の内野悌司先生は，まず医療・福祉サービス改革の内容を説明され，特に他職種が担っていた業務を複数の職種で協同化することを指す「タスクシェア」は，労働時間短縮の秘策と語られた。公認心理師は，医療チームにおける役割や業務分担の見直し・検討を促す存在になるため，さまざまな場面に参入し，心理師の必要性の理解に努めることが大切と話された。次に令和６年に診療報酬に算定されている公認心理師関連業務を示され，経営的な視点を持ち，小児特定疾患カウンセリング料や産後うつが対象のハイリスク妊産婦連携指導料に関して，タスクシフトも含め心理師が積極的に参入していくことの重要性，アウトリーチ事業で外に出ていくことの必要性などについて話された。公認心理師フロンティアのミッションとして，緊急支援における心理的サポート，犯罪被害者等へのトラウマ・ケア，差別を受けたHIV感染者の方や自閉スペクトラム症の人に代わってのアドボカシーなども重要で，心理師に担っていただきたいと述べられた。

シンポジウムⅠ「発達障害との関わり―小児期から成人期まで―」

まず，小児期について，あおさきこども心療所院長　梶梅あい子先生から，障害診断や神経障害児の親子には，早期からの保護者支援が必要と語られた。診断受容に関わる根強い「スティグマ」へのサポートや，心理師のペアレントトレーニング，支援者があせらないことが重要と話された。

次に医療法人翠星会松田病院　福島太郎先生が，思春期の発達障害について触れ，行動の問題のみに注目した関わりにならないように考えていると

語られた。さらに思春期の発達障害の特徴について解説され，支援や関わり，治療に求められるものなどについて説明された。

次に紙屋町こころのクリニック院長　皆川英明先生は，軽症型の発達障害の発見の経緯を解説された。パーソナリティ障害／重症神経症と診断される患者の中には，その背後に軽症型の発達障害を有する一群がいると考えられ，分析的精神療法など洞察を促すアプローチは無効であるため，背景の発達障害特性を見逃さないことが重要と話された。

シンポジウムⅡ「他機関で働く公認心理師より今，今後を見据えて」

まず，押尾クリニックの菅武史先生から，「私と精神科医療　過去・現在・未来」と題して，過去は自由にいえる雰囲気を，現在はさまざまな分野をつなげることを意識し，未来は定点観測的な働き方から得られる視点を生かし，気付きをスタッフに伝えることで疲弊を防ぐことができると話された。

次に，心理相談室アフォーダンス代表の古元邦子先生から，病院および開業臨床経験で学んだ連携と協働や，保育・キンダーカウンセリング制度，言葉の発達のプロセスについて説明をいただいた。保育者の専門性とカンファレンスの意義，スーパービジョンの体験，心理の専門性に触れ，専門的な態度を身に付けるには訓練が必要であると締めくくられた。

次に三原病院の竹田博樹先生が，心理職がさまざまな枠組みで働く機会が増えてきたことを説明し，チームのメンバーの「私」と，チームである「私たち」がどのようにふるまうかという両視点が必要と話された。願わくば，論じるだけでなく，言行一致で実践できる心理職でありたいと思っていると締めくくられた。

最後にそれぞれシンポジスト達の見解からの意見交換，参加者からの質疑応答が行われた。

講演Ⅲ「多機能型精神科診療所における公認心理師の仕事―心理師自身も多機能です―」

メンタルクリニック・ダダ院長　大嶋正浩先生から，多機能型を目指された経緯や三つのNPO法人を含む多機能について紹介された。スタッフの不安や不満に対しては，症例検討会を増やす対処が効果的であったことについて話された。また豊富な症例経験に基づいて，発達障害のチェックポイントや，希薄な人間関係が「虚しさ」の要因であること，自分がないためコントロールできる体重に「生」を感じること，勝敗でしか自分の存在を主張できない等の特徴，またしんどさを訴えても病気として捉えられるつらさなど，発達障害への理解を深める話をしていただいた。

地域活動・連携の点では，垂直・水平連携に触れ，自己組織をもとに地域と連携を図ることが重要と述べられた。心理師は，つながりや支援から漏れ，衝動や恐怖との折り合いをつけて生きている人を支える伴走者であり，患者理解，人間理解の点で，PSWと連携し，日常の営為にはすべて歴史があるという当たり前のことを共有しながら連携してほしいと締めくくられた。

シンポジウムⅢ「広島県での公認心理師の取り組み」

まず西部こども家庭センター初期対応係長　児玉彩奈先生は，従事している児童虐待への対応などの業務内容，またサインズオブセーフティアプローチなど，公認心理師としての専門性を取り入れる工夫などについて説明された。

次に，広島県健康福祉局 疾病対策課　岡智慧先生から，自殺対策推進計画として「いのち支える広島プラン」の目指す姿と目標，自殺者の現状，いのち支える広島プランの重点施策と推進体制と公認心理師の役割について話をいただいた。

次に，松田病院　石原由紀子先生から，思春期こころの電話相談事業というテーマで，電話相談事業立ち上げの経緯，事業の特色，業務の概要，年2回実施されている研修会内容，広報効果で電話相談が増えている点，今後の展望について話をいただいた。

最後に広島市立北部医療センター安佐市民病院岡野浩二先生は，広島県公認心理師協会の設立の経緯や目的，また個々人では現実が難しいことを皆で力を合わせて行うことが，地域の職能団体の大きな意義であるという話をされた。

閉講式では，日本精神科医学会から受講者代表に受講証授与が行われ，広島県副支部長の長尾早江子先生に感謝状が贈呈され，日本精神科医学会から開催お礼の挨拶と最後に長尾早江子副支部長の閉会の挨拶で2日間の研修会は閉講となった。

（日本精神科医学会
学術教育推進制度学術研修分科会）